

# 榆生山古墳

(福岡県築上郡吉富町所在古墳の調査)

吉富町文化財調査報告書

第 3 集



1 9 9 1

吉富町教育委員会

## 序

吉富町には、古代文化を物語る幾多の遺跡が、町内の丘陵地を中心に存在していましたが、環境の整備と共に次第に失われて来ました。中でも、楡生山古墳は、現存する古墳が少なくなった本町にとっては貴重なものであり、築上郡内においても数少ない竪穴式石室であると言われており、価値ある古墳であります。

この度、墳丘上にある石が下位にある民家に落下する恐れがあるため、危険防止のためその石を除去し、保護擁壁を築き、落石防止工事を行いました。それに伴い工事に先立って、部分的な発掘調査を実施しました。この報告書は、その成果をまとめたものであります。

この調査報告書を、古代文化を探る資料として御利用いただき、埋蔵文化財についての御理解と御協力を願うものであります。

この度の発掘調査及び調査報告書の作成にあたり、御指導、御援助を賜りました福岡県教育庁文化課、並びに御協力をいただきました地元関係者の方々に、心より感謝いたします。

平成3年3月30日

吉富町教育委員会

教育長 高原 洋

## 凡 例

1. 本書は、吉富町教育委員会が平成2年度に実施した楡生山古墳の調査報告である。
2. 発掘調査は福岡県教育庁京築教育事務所の伊崎俊秋が担当した。
3. 出土遺物の整理は福岡県立九州歴史資料館において岩瀬正信氏の指導のもとに行い、実測は原富子氏と伊崎が行った。
4. 挿図の浄書は豊福弥生氏と伊崎が行った。
5. 本書で示した方位は磁北である。
6. 本書の執筆はIの一部を別府真二が、その他と編集を伊崎が行った。

<表紙> photo.1 楡生山古墳と鳥居

## 目次

I. はじめに	1
II. 遺跡の位置と環境	3
III. 従前の調査と現況	4
IV. 調査の内容	5
V. おわりに	15

## I. はじめに

楡生山古墳の墳丘北側斜面には大石が露出しており、以前から直下にある民家への影響が懸念されていた。ここ近年のうちに、その楡生山古墳の傾斜面は雨水等により土砂が流出し、崩壊が著しく、墳丘上にある石の民家への落下の危険性が高くなってきた。そのため、大石を除去し、保護擁壁を築く落石防止工事を行うこととなり、それに先立って同古墳の発掘調査を実施することとなったものである。

1990（平成2）年11月14日、吉富町教育委員会は、楡生山古墳の擁壁工事についての対応に関し京築教育事務所と連絡をとった。これをうけて11月21日、伊崎が現地を立会し、工事のあり方を聞くとともに対応を協議した。工事は、墳丘中に露出している大石を除去したうえで墳丘の一部を削って擁壁を築くというものであったので、まず墳丘測量を行い、次いで重機の進入部分を含めたところの墳丘が削平される部分についての最小限の調査を行うことで対応すべき、とした。残存しているとされる石室については、削平部分にかかるか否か判断しえないので、工事の進捗に合わせて対応すべきものと考えた。調査は工事のスケジュールに合わせて、その前と併行しながらの二面性をもって行うことが望ましいであろうとし、早急に工事図面の整備と予算措置等の対応を町が行うこととなった。そして12月26日、再度協議して、翌年1月中旬より調査に入ることとした。

年が明けて1月11日、最終的な打合せを行い、1月16日より調査に入り、同23日頃から墳丘の大石を除去してもらうことで事業の遂行をはかることとなったのである。



photo.2 楡生山古墳遠景

発掘調査は1月16日に着手し、最終的に1月25日に終了した。調査としては小規模のものではあったが、今回の調査によって前方後円墳もしくは前方後方墳であることが明らかになり、地域史解明に重要な一事業を提供した。近い将来において、同古墳全域の発掘調査・整備の計画を進めていくことが望まれる。

この発掘調査は吉富町教育委員会が町単独予算にて実施した。



Fig.1 榆生山古墳位置図 (1/10,000)

関係者は次のとおりである。

吉富町教育委員会	教育長	高原 洋		
	社会教育課 課長	樋口 翌	主 事	土屋 景子
	課長補佐	藤田 敏子	"	向野 正秀
	"	舛川 貞夫	主事補	別府 真二
福岡県教育庁京築教育事務所	主任技師	伊崎 俊秋・緒方 泉		

調査にあたっては隣接家である横川貞夫氏並びに地元自治会長である小島政喜氏には、期間中多大の協力があつた。また次の方々の指導・援助を受けた。記して感謝します。

吉富町文化財保護委員会々長 中島末男、同委員 河野永；福岡県文化財保護指導委員 浜嶋三司、同 宮木工；福岡県教育庁文化課 池辺元明、飛野博文、小川泰樹、日高正幸；九州歴史資料館 宮小路賀宏；岸本組 岸本悠二

調査には次の人々があつた。

小島政喜、末松新、尾田妙子、白川ミチ子、太田ツル子、小島ヨシ子

## Ⅱ．遺跡の位置と環境

楡生山古墳は、福岡県<sup>もじようけんしよんしよまぢみちりよ</sup>上郡吉富町楡生に所在する。

現在の福岡県と大分県の境界となっている山国川と、その西を流れる佐井川はともに北流して周防灘に流入している。その両河川の間には松尾山系から伸びる段丘が断続的に海の近くまであり、その上には各時代の遺跡が営まれてきた。

楡生山古墳は佐井川右岸の独立丘陵上に立地し、古墳の立地基部が標高19m程なので、とくに東側に開けた低地と比すれば5～7mの比高がある。

この楡生山古墳の周辺には、後述の岡為造氏の著述により、多くの古墳や遺跡の存していたことが知られる。氏の述べる古墳群はすぐ近隣では三つが<sup>(註1)</sup>あり、南から楡生山古墳群、茶臼山古墳群、鈴熊山古墳群である。楡生山古墳群はこの報告の1号墳のほか13基があつたとされ、茶臼山9基、鈴熊山7基が示される。また、ここから東側の低地をはさんで800m程の所には山国川左岸に独立丘陵があり、その上には広運寺山古墳群、天仲寺山古墳群が営まれている。これらの古墳群は今も住時も最も海に近い所に営まれたものである。<sup>(註2)</sup>

なお、楡生山古墳は古墳群中の名称は1号墳となるが、本書では1号墳とは呼ばずに楡生山古墳と称しておく。

註1. 小田富士雄他「岡為造氏収集 考古資料集成」 古文化談叢 第11集 1983

註2. 吉富町教育委員会『天中寺古墳・広運寺古墳』 吉富町文化財調査報告書 第1集 1983

### Ⅲ．従前の調査と現況

楡生山古墳（1号墳）については古く明治41年（1908）に岡為造氏が「考古界」6-10に簡単に紹介されたことがある。その後大正4年（1915）に古墳の墳頂に営まれた経塚が発掘され、のち昭和2年（1927）に至って主体部の堅穴式石室が発掘された。このことについては岡為造氏による『築上郡史』等を編むに基礎とした自筆稿「築上史料」があって、そこに楡生山古墳と経塚についての詳しい記載があり、それは小田富士雄氏等の尽力によって『古文化談叢』の第11集（1983）に考古学関係部分が収録されている。この報告の巻末に一部を引用しておく。全体の詳細については『古文化談叢』に拠らるたい。

ここに岡為造氏の記述より楡生山古墳の概要を示しておこう。

墳丘は「周囲三十三間、高さ約二間、一見小山の如き円墳」であるというから、直径19m、高さ3.6m程のものとなる。石室は安山岩の扁平石6枚で蓋をした堅穴式石室で、壁面は川原石を積み上げており、全面朱塗りであった。長方形プランをなし、長さ八尺（242.4cm）、幅二尺一寸（63.6cm）、高さ二尺四寸（72.7cm）で、東南東より西北西の方向に主軸を置いている。遺物には、頭蓋骨1、大腿骨1、直刀数振、鉄鏃22、鉄鎗1があった。

石室の上位には、川原石にて小石室を作った中に青銅製経筒が埋置されていた。

上記出土遺物のうち、鉄矛と鉄鏃の一部については岡氏資料の中に残っており、実測図が公にされている（Fig. 2）。

なお、今回調査の契機となった墳丘中の大石については、岡氏の言うように、社地に造成する際に近隣古墳の石材を持ってきて置いたものと思われる。そう考えないと、墳丘中に大石の存する意味が理解しえない。

楡生山古墳の現況は、墳丘の西側が大きく削平され、その裾部には高さ1m程に河原石の石垣が築かれている。その北側前面には「五社神社」と陰刻した扁

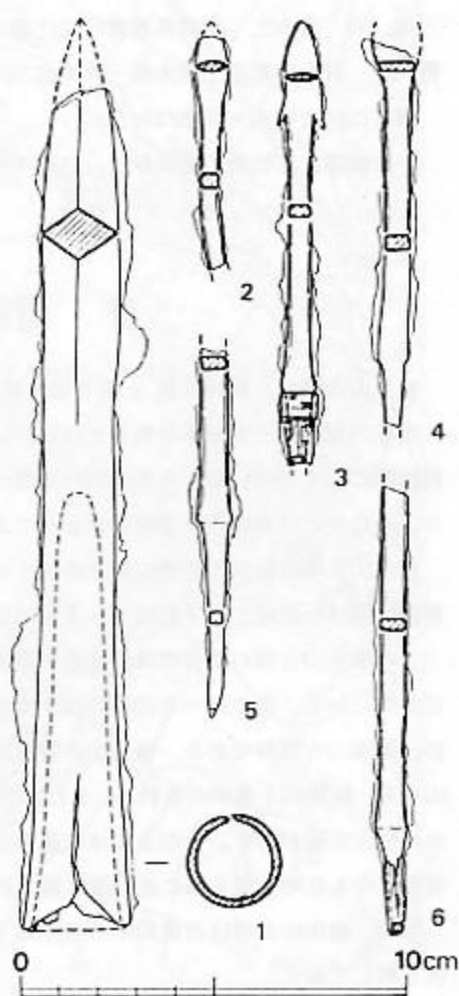


Fig.2 楡生山古墳出土鉄器実測図(1/2)

額を置く花崗岩製の明神鳥居と、さらに西側に楡生区の公民館とが建てられている。墳丘上にはその昔御祖神社がまつられていたのを明治42年に他と合祀されたという。北側と東側には住宅が密集しており、この住宅建設の際にも墳丘の一部が削平されている。

墳頂は東側に凹みがあるほかは平坦面を持つ。東側と北側の墳丘中に大石20数個があり、これを除去することが今回調査の発端であった。

墳丘の南側はもとの墳裾の一部が残存しているように見え、そして東側へは低くなだらかな舌状の伸びがある。この舌状に伸びた部分が前方部のように見えないこともない、というのが現況である。見かけ上は直径18m程の円墳と見えられ、これまでもそのように報告されてきた。墳頂部最高所は標高24.16mを測り、南側裾部から見ると4m強の高まりを持っている。



photo.3 楡生山古墳近景

## Ⅳ. 調査の内容

発掘調査は工事にてカットされる必要最小限の部分と、墳丘東側に前方部が存するか否かの確認ということに主眼をおいて行った。まだ墳丘中に遺存しているという石室については、墳丘をカットする際にも現れなかったので、今回は調査を見送り、将来的にこの古墳を整備する段階で行うこととしておいた。具体的には墳丘の北と東にトレンチをA・C・B・Dの順に設けたが、Aトレンチは最終的にDトレンチと一体となり、B・Cトレンチも一部が接続した。各トレンチから出土した遺物はまとめて後述する。

### 〈A・Dトレンチ〉(Fig. 3, photo. 5・11)

ここでは、L字状に削り出された整形面と、それを切るような形状での溝を検出した。この整形面および溝は、B・Cトレンチで検出した前方部削り出しの主軸方向とはその向きが平行でも直交でもない。削り出しについては若干の曲折はありうるとしても、溝については次に述べる土層からみても、この古墳よりも古い時期の所産を考えた方が無難である。

溝は上端幅210cm、深さ90cmを測り、ほぼ南北方向に向いているようだ。その上面と内部には大小の円礫が多数見られた。溝の途切れる北端部側から南へ階段状となり、あるいは溝でなく土城

の可能性もある。

墳丘土層 (Fig. 4) は古墳の直径に沿うての断面ではないので盛土のあり方等において古墳全

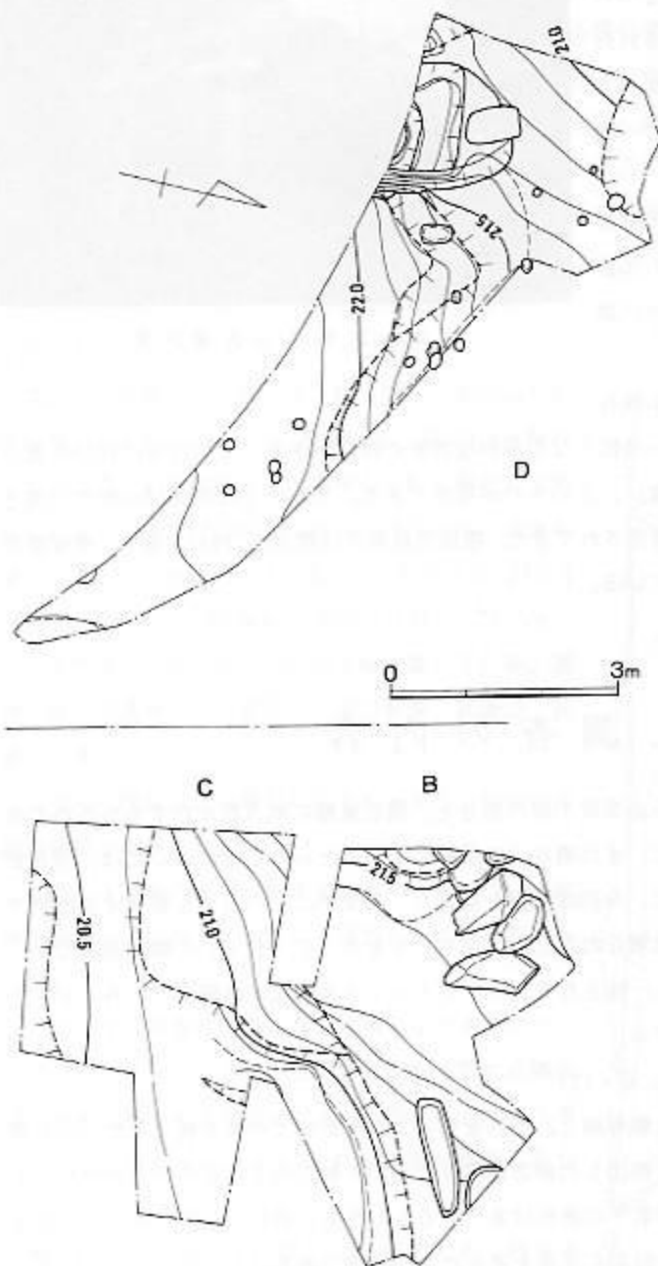


Fig.3 榎生山古墳トレンチ測量図 (1/100)

体に一般化出来ない側面もあるが、大略は変わるまい。大きくは5段階の盛土と考えることができる。それもⅠとⅢとはほぼ似た黄灰褐色砂質土であり、地山掘削の土を盛り上げている。Ⅲは更に大きく2層に分離できそうである。Ⅱは茶褐色あるいは茶色を呈する粘質の土で、中に小さな河原石を含んでいる。Ⅳ・Ⅴは茶黒褐色砂質土である。以上のほかに溝の部分は明るい茶色系の砂質土が入っており、溝上面にある石のあたりから土質が変わっている。これからみても、この溝の上部には墳丘の土がのっており、溝自体は古墳の墳丘を盛り上げる以前に掘削されていたということになろう。

〈B・Cトレンチ〉(Fig. 3)

現存墳丘の東部に設けたトレンチである。花壇や植えこみ等によりあまり面積を広げられなかったが、ここで削り出した前方部を検出した。

Bトレンチでは西端に大きな花崗岩礫が現れたが、この性格はわからない。このトレンチの中央付近にて、前方部から後円部へとL字に曲がるくびれ部





photo.4 溝検出状況



photo.5 Dトレンチと土層



photo.6 作業風景①

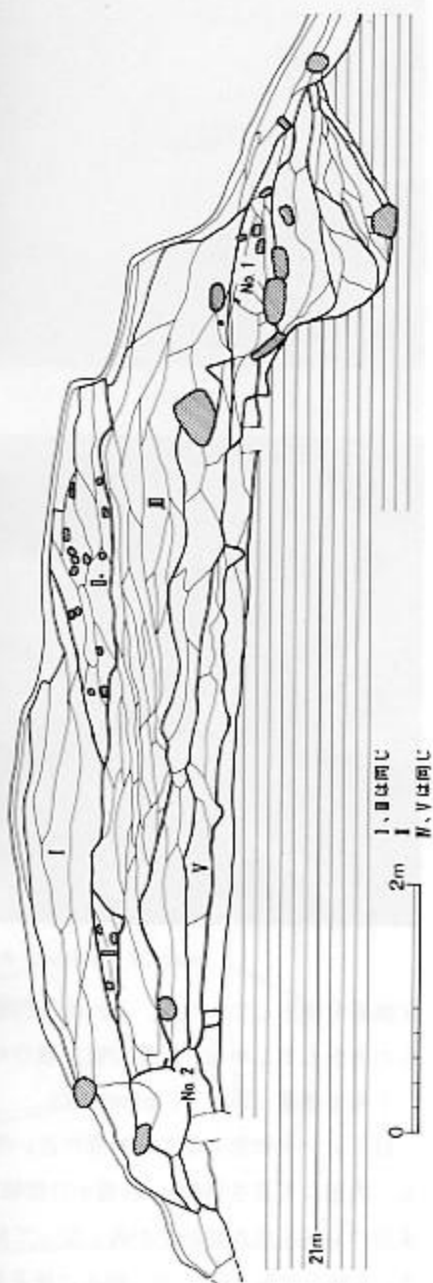


Fig.4 楡生山古墳墳丘土層図 (1/60)



photo.7 B トレンチ全景



photo.8 B トレンチの前方部

変換線を検出していたが、これは後円部墳丘への接続を考えれば、偶々そのように現出しているものと捉えるしかない。前方後円墳の可能性もないではないが、今は前方後円墳としておく。

#### 1号土墳墓 (Fig. 5、photo. 9)

B トレンチの前方部くびれ部に近い所で前方部削り出しの主軸に平行する方向に営まれている。内法にて長さ148cm、西側小口部幅33cm、東側小口部幅25cm、深さは検出面より22cmを測る。床面のレベルは西側がやや高くなっており、小口幅からみても西側を頭位としていたものだろう。主軸方位S-69°-W。埋土は淡茶褐色砂質土である。床面その他にベンガラ等の遺存は認められない。鉄器片1と円筒埴輪片5点が出土した。埴輪片は図示しえない。

鉄器 (Fig. 9-39) 稜をもって屈折した破片である。断面菱形の袋穂状となる部分の破片かとも思えるが定かでない、本来の形状・用途とも不明である。現存長36mm、厚さ6mm。重量感の

が検出された。前方部の上には土壇墓1基とピットとがあった。くびれ部から前方部へは、東北方向に1.2m程やや外湾して延びたあと、そこから外へ開いて広がっていく。くびれの所では裾と台状部との比高が30cmくらいはあるが、検出した前方部の東端では緩やかな15cm程の段となっている。これをもって、前方部の長さがあまり長くない帆立貝形式になることを想定することも可能ではある。くびれから後円部へはやや角張りながらカーブしていくようにあるが、おそらくやがて円くなってゆくのだろう。前方部における盛土はもともとあまり高くはなかったものと推定される。

C トレンチでは当初直角に近い角度で曲がっていく緩い

変換線

ある破片である。

#### P1

1号土墳墓の北隣にて検出の切り合いをもった2つのビットである。約半分のみを検出で、のこりは調査区外になるけれども、家屋造成の際に削られて全ては遺存しない。東側の新しい方は長さ48cmの隅円長方形プランとなるようだ。床面には5cm程に黒色炭化物層が見られた。西側の切られた方は西壁が焼けてい



photo.9 1号土墳墓・P1

た。新旧いずれとも性格は不明である。埋土中より円筒埴輪の小片1点(1.5cm四方)が出土した。

#### 出土遺物 (Fig. 7~9)

A~Dのトレンチ発掘時に出土した土器および採集品について述べる。出土品もプライマリー

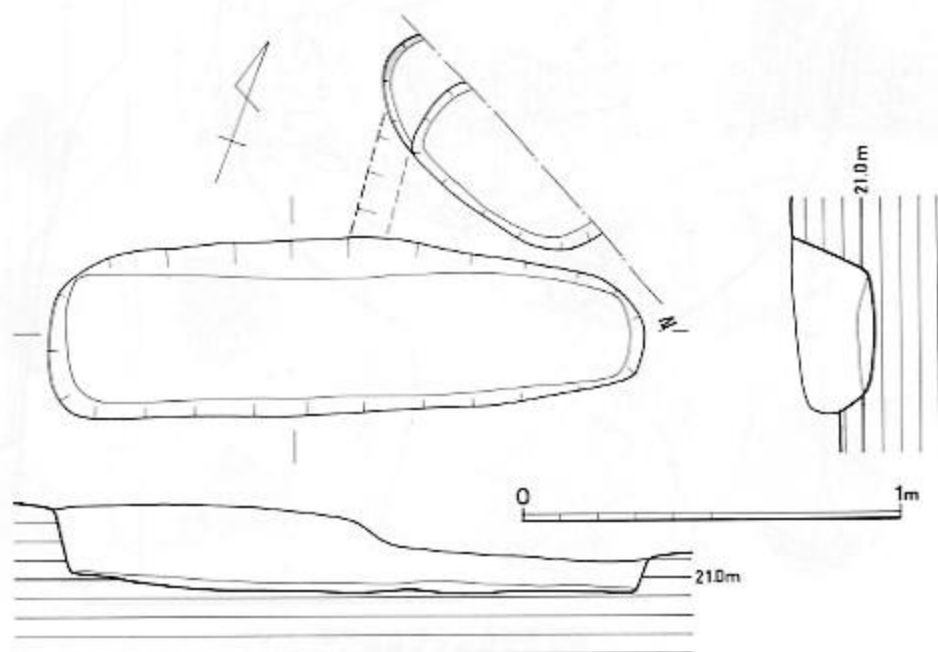


Fig.5 楡生山古墳前方部土墳墓実測図 (1/20)

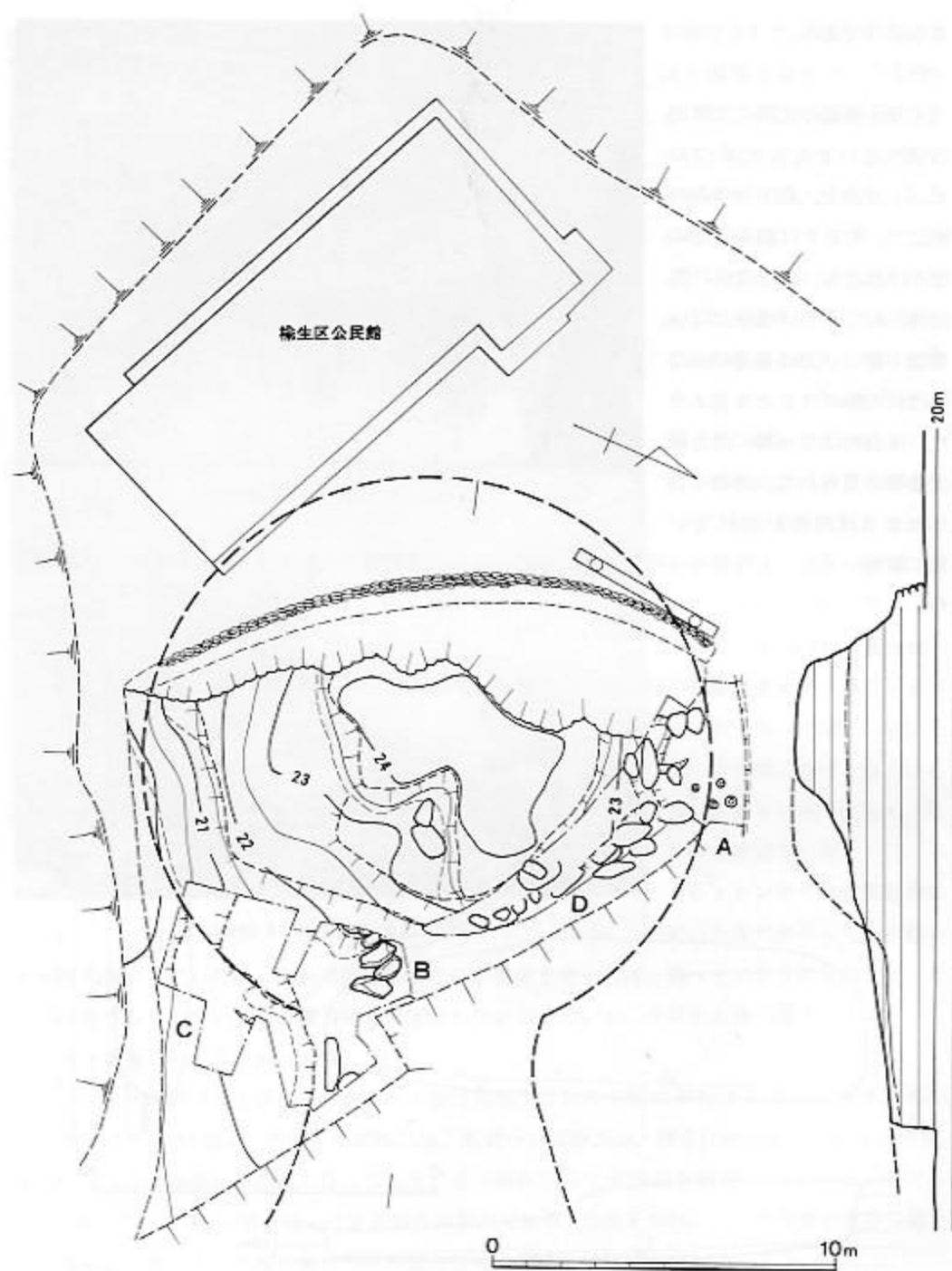


Fig.6 榆生山古墳墳丘測量圖 (1/200)

な位置におけるものは皆無である。

土師器 (Fig. 7-1) 甕の肩部付近と思われる破片である。内面に指なでの痕跡をみる。外面の調整は不明。Dトレンチ西半部より出土。

須恵器 (Fig. 7-2~9) 2はBトレンチの前方部裾から出土した坏身の小片で立上がり  
を欠くが、やや内傾気味の立上がりとなるようだ。胎土中に砂粒を含み、やや紫色がかった器肉  
をなす。焼成はふつうで、黄灰褐色を呈する。受部径は15.8cm。3~9は甕の破片で、6のみが  
Cトレンチで他はDトレンチから出土した。3は外面に平行タタキを施し、少し灰被りとなる。  
内面は同心円当具痕の上をなで消している。焼成良好で、この1点のみ他の6点と異なって古い  
様相を持っている。4~9は外面が平行タタキの上にカキ目を施し、内面は同心円当具痕を見る。  
ただ5のみは外面にタタキが見えない。6と7、8と9は同一個体の破片とみてよい。9は  
Fig. 4のNo.2にあたる。

埴輪 (Fig. 8・9-10~38) 10~35は円筒で、36~38は形象となる。いずれもあまり大きく  
ない破片であり、全形を何うには支障の多いものばかりである。13・18・37を墳丘上から採集

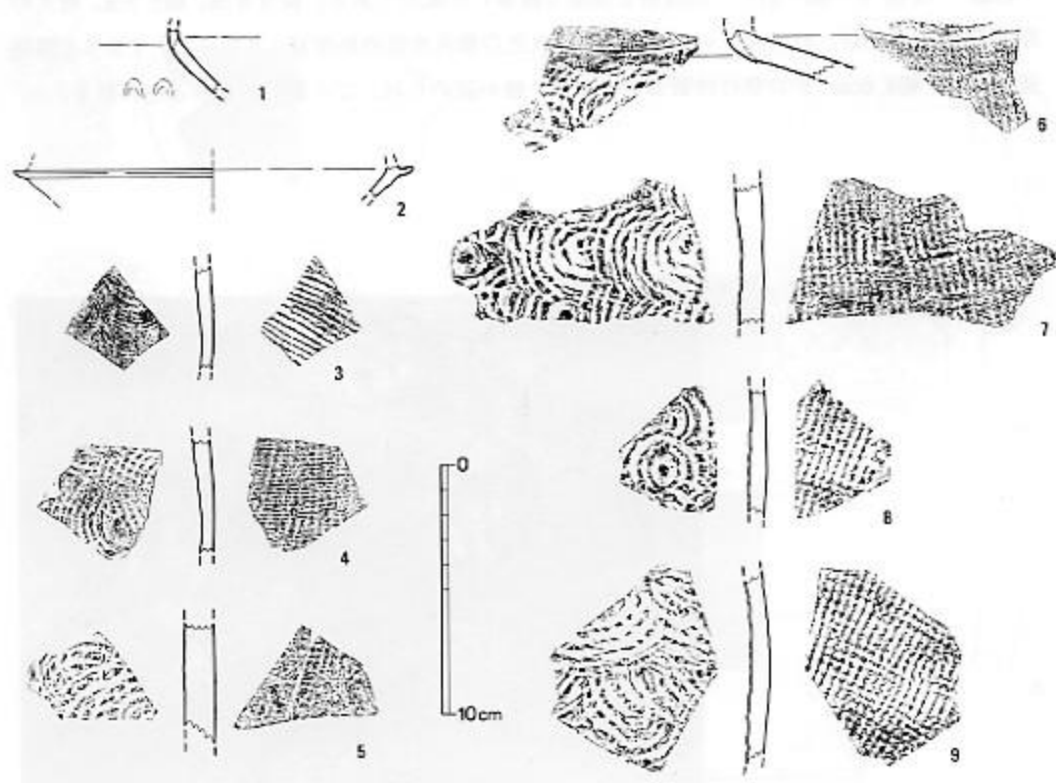


Fig.7 榎生山古墳出土遺物実測図 1 (1/3)

し、16・23・26・27がBトレンチから出土した以外は全てDトレンチから出土した。全ての破片を通じて、胎土は砂粒があまり多くなく、赤褐色粒子あるいは角閃石を含むものがある。また焼成は概ね良好で、赤みがかった黄色の色調をなす。いくつかは丹塗りの痕跡を認める。

円筒埴輪（10～35） 10は朝顔形になろう。11は口縁内面に段をもつ。12はFig. 4のNo.1である。13～21、26～29における突帯はいずれも断面が台形を呈し、1～1.5cm程突出している。M字状になるものはない。21のみはやや細くて突出度が著しい。30～35の底部はやや細身のものどどしりしたものがある。これらの円筒埴輪は外面が縦方向の粗い刷毛目、内面は不連続の横刷毛目を施している。突帯部分の径は26が16.2cm、27は19.1cm、28は21.1cm、29は23.2cm。底径は34が17.6cm、35は16.2cmを測る。総じて径のあまり大きくない円筒となる。33の底部周辺において2cm四方くらいに軽く青変した部分があるが、これをもって還元焼成されたとはいえない。

形象埴輪（36～38） 36はいま台形状の破片であるが、2辺は面をとって透かしになるものであろう。家形の窓の部分か。37・38は同一の形状をなす円筒形で、動物の足の部分であろうか。38の底径は5.8cm。他にAトレンチより1点、Dトレンチより丹塗りの破片1点出土した。

石器（Fig. 9-40・41） 40は墳丘頂部で採集した砥石である。長さ8cm、幅5.5cm、最大の厚み2.2cm。粘板岩。41はAトレンチ出土で白灰色の凝灰岩質の粘板岩（スレート）である。現存長12.9cm、幅8.6cm。小口部には新しいのこぎり跡が認められ、ごく新しいものと思われる。



photo.10 作業風景②

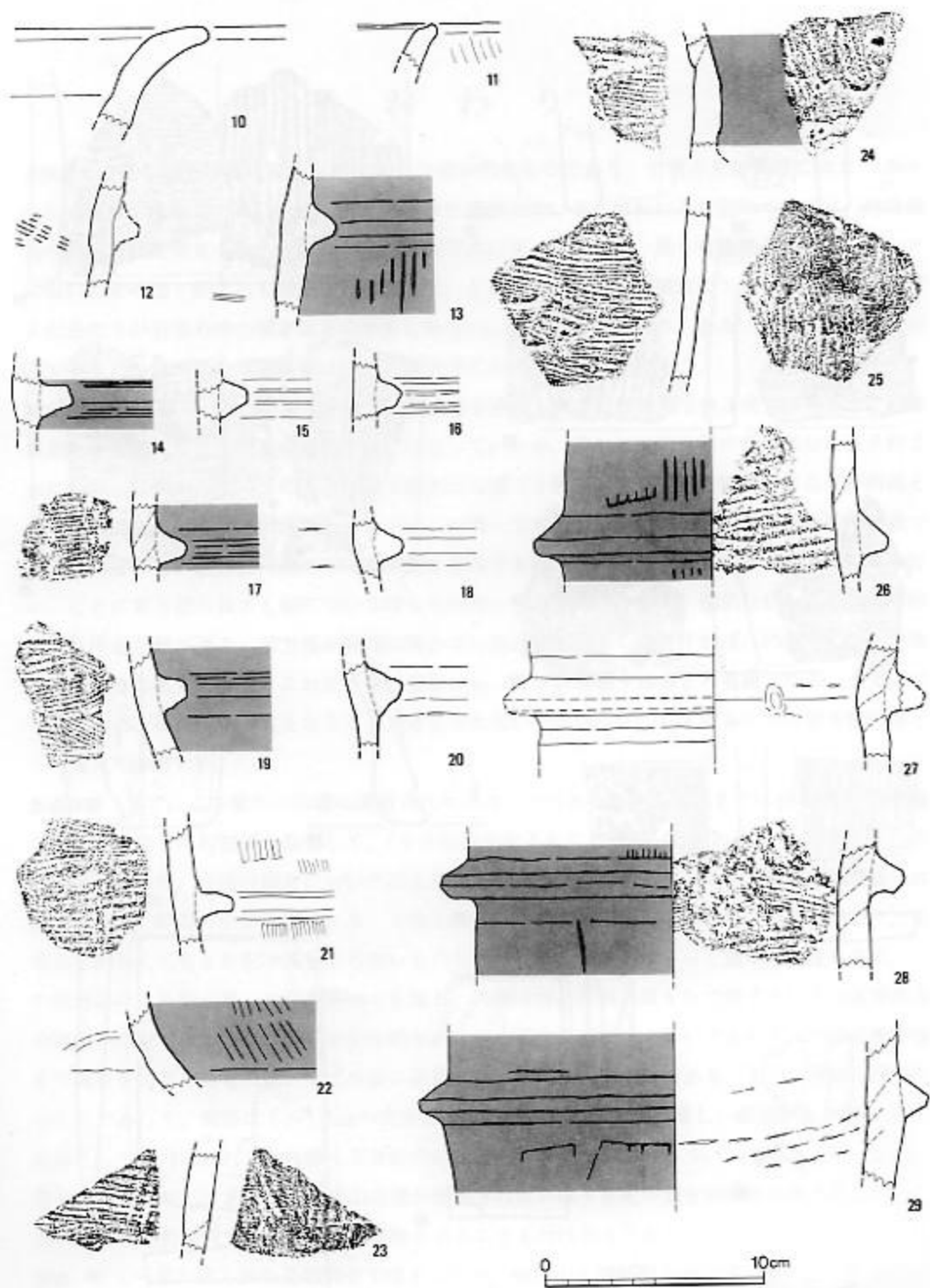


Fig.8 梳生山古墳出土遺物実測図 2 (1/3)

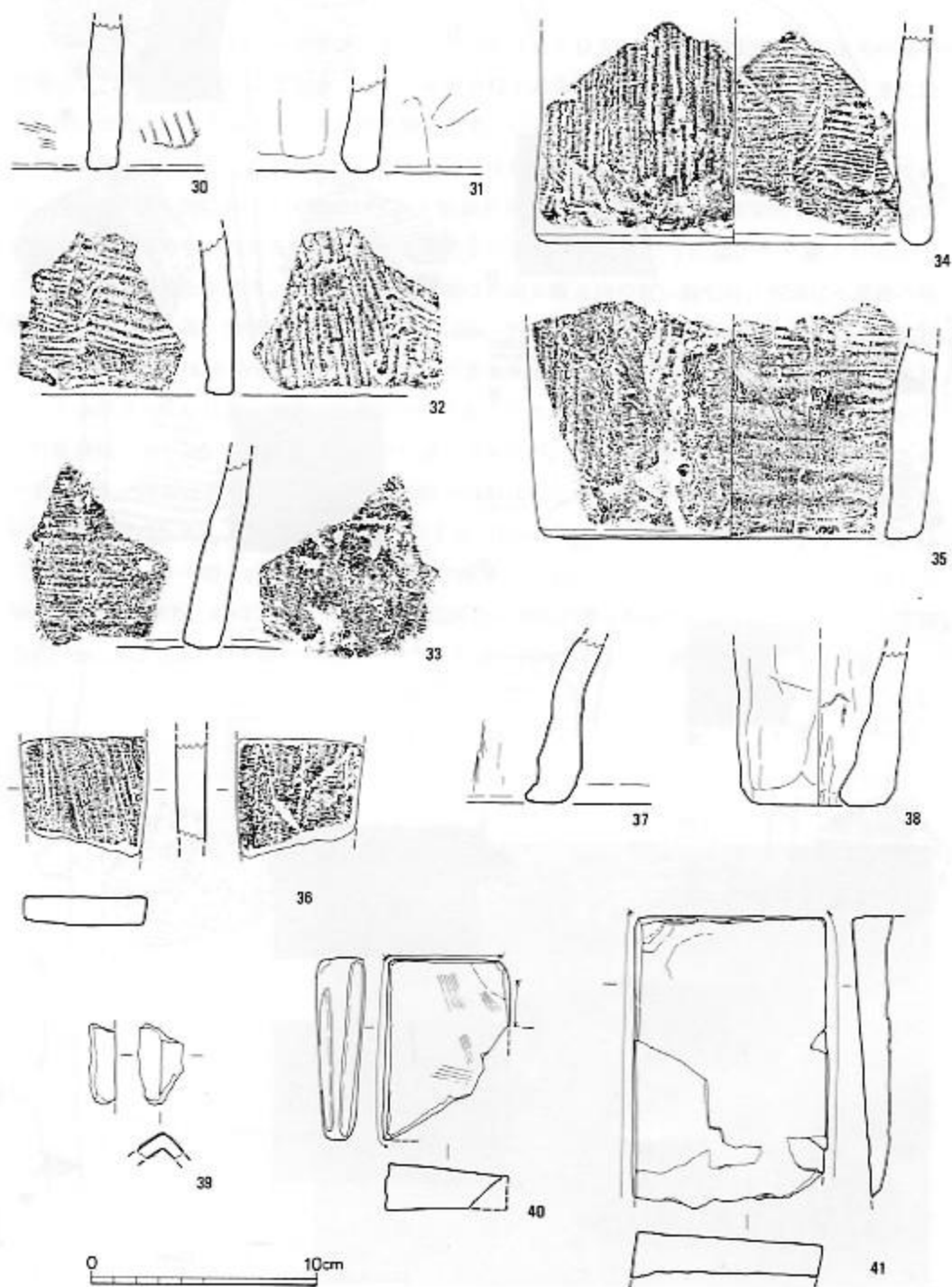


Fig.9 榆生山古墳出土遺物実測図 3 (1/3)



## V. おわりに

**主体部** 今回の調査は擁壁設置工事に先立つ部分的なものであり、古墳の全容解明にはまだ不十分な点が多く残っている。特に、墳丘中に未だ遺存していると思われる石室については、岡為造氏の記録では東南東—西北西に主軸を持つ堅穴式石室とされるが、最も可能性のあるDトレンチ(註1)においてその掘り形すらも検出されなかった。となると、現状での墳頂にて大きく湾曲してくぼんだあたりが石室の中心部となるのかもしれない。堅穴式石室なのか、あるいは堅穴系横口式石室であるのかは将来の環境整備に向けた調査等において明らかになる。

**前方後円墳だった** 一方、主墳丘の東側に前方部を検出したことは特筆される発見であった。調査以前から東側への丘陵の延び具合が気にはなっていたが、果たして前方部の南側部分を長さ約3mにわたって検出した。このことにより楡生山古墳(1号墳)は前方後円墳であることが明確となったのである。前方部が南側の片方の辺しか残っておらず、かつ後円部もごく部分的な調査であったことから、前方後円墳としての規模を復原するには基礎とするデータがあまりにも少ない。ことに前方部の長さや幅についてはもう何如ともしがたい。ただ、強引ながらも後円部の陥没した所を主軸が通り、前方部が極端に開かない形状を呈していたとすれば、Fig. 6のような復原図とすることもできる。これだと後円部径17m、くびれ部幅7mほどの規模となる。本文中でもふれたように帆立貝形式となることも考えられないではないが、いまはふつうの前方後円墳として捉えておきたい。

**築造時期** さて、この楡生山古墳の築造されたのはいつであろうか。これまでに採集された埴輪や昔日に露呈した石室等を勘案して、「5世紀後半を下ることはないと思われ」という年代観が示されていた。今回の調査において出土した土器・埴輪片を見ると、2・4～9の須恵器片は他より新しい時期の所産と思われる。(註2) 1の土師器は小片にて確実ではないが、薄手のつくりであることからしても5世紀中葉を下らないものと捉えたい。あるいはもっと遡る可能性もある。3の須恵器片は外面が整った平行タタキを施し、内面は同心円当具痕をなで消すという古式須恵器の調整手法を有する。これは5世紀中頃を前後する頃に位置づけてよいであろう。円筒埴輪の破片で調整を知りうるものは、全て外面が縦刷毛目、内面は横刷毛目である。また、全体に薄手のつくりであって、突帯は1～1.5cmの突出がある。埴輪の時期比定は難しい側面があるけれども、総体としてみればこれらの特徴も5世紀代に比定して大過ないであろう。つまるところ、少ない資料からの判断ではあるが、楡生山古墳が築造されたのは5世紀中葉を前後する頃と捉えたい。なお、5世紀前半代まで遡りうる可能性があることも付け加えておこう。

**意義** ごく一部の限られた発掘調査ではあったが、楡生山古墳が前方後円墳であることを確認しえた意義はきわめて大きい。山国川下流域の平野部においては、これまでは昭和38年に土取りで破壊されたと言う中津市下池永の亀山古墳(註3)が全長70mの前方後円墳であったとし、これが唯一の

ものとされてきた。豊前国内において山国川流域は、京都・宇佐の両地方の間であって前方後円墳を殆どみない地域であると考えられていたが、今回の楡生山古墳が前方後円墳とわかり、さらにはごく最近になって築上郡大平村下唐原に全長60m程の前方後円墳が確認されたのである。この金居塚古墳は前方部が低く、一見して古式のものであることがわかる。主体部は削平されて失われているのかもしれないが、粘土槨か木棺直葬というような石材を用いないものであった可能性が高い。ともかく、山国川下流域においても最低3基は前方後円墳が存したのであり、豊前地方の古墳文化については、従来の捉え方を若干修正していく必要が出てきたことだけはまちがいないだろう。

註1. 小田富士雄他『岡為造氏取集 考古資料集成』古文化談叢第11集 1983

2. 註1のP28

3. 大分県教育委員会『上ノ原遺跡群1』中津バイパス関係埋蔵文化財調査概要 1982

4. 『福岡県遺跡等分布地図(豊前市・築上郡編 1976)』において、新吉富村の巨石塚を前方後円墳と表示してあるが、これについては前方後円墳とする確証はない。その名のとおりに巨石を使った石室であることからすれば、むしろ円墳とすべきであろう。

5. 福岡県文化課飛野博文氏の教示による。山国川をのぞむ台地上の縁辺部に立地している。



photo.11 D ト レ ン テ

## 8、東吉宮村ノ古墳〔三二一六〕

### (4) 楡生山ノ古墳

當村内ニテ最も多ク古墳ノ跡ヲ留ムルハ楡生山デ、此ノ小丘ニハ礫カニ古墳ノ跡デアルト認定セラレルモノ十四基ヲ數ヘルコトガ出来ル。併シ目下只一基ヲ残ス外殆ド其ノ跡形モナキ迄ニ破壊セラレテシマツテ居ル。今其ノ個々ノ調査結果ヲ記スト左ノ如クデアル。

コノ小山ノ西南<sup>山頂番号、山下側</sup>ニ周開約三十三間高サ約二間位ノ小丘ガアリ其ノ西ト北トニハ巨石ノ石垣ヲ廻ラシ上部ハ平地ニナツテ居ル。コノ所ニハ元村社御祖神社ト其ノ境内社貴船神社トガ祭ラレテ居タガ、明治四十二年隣区鈴鹿ノ村社貴船神社ニ合祀セラレタ。ソノ西ト北トノ石垣ハ此所ヲ社地ニスルトキカ或ハ社地ヲ拡張スル時カニ付ニアツタ古墳ノ石垣ヲ破壊シテ築イタモノト想ハレル。

(中略)

其ノ後昭和二年二月十五日當区岡民道、全勝、友田作造、全勝夫の四人ガ前述経簡ヲ發見シタ所ヲ更ニ掘下ゲテ見タ所地表下約二尺デ一ノ扁平ナ石ニ掘リアテタ。仍ツテソレヲ取除イテ見レバ内部ニ箱形ノ空洞ガアリ其ノ周開ハ川原石ヲ煉瓦積式ニ積上ゲ拳大ノ礫石ヲ底部ニ敷詰メ土ハ殆ド入ツテ居ラズ副葬品ノ一部及頭蓋骨ナド見エテ居タト。後行ツテ見レバ蓋石ハ六枚ヲ板状節理ノ安山岩ヲ用ヒ裏面ニハ朱ヲ一面ニ塗り、又四隅ノ石垣及ヒ底部ノ礫石等何レモ朱色ヲ呈シテ居タ。

石室ハ長方形デ長サ八尺、巾二尺一寸、高サ二尺四寸デ東南東ヨリ西北西ノ方向ニ長ク構成セラレテ居リ、遺物トシテハ頭蓋骨一、大腿骨一、直刀數振、鉄鏃二十二、鉄鎗(袋穂)一デ頭蓋骨ハ殆ド完全也、東南東側壁ノ近クニアツタ。一休此ノ附近ノ古墳ハ多クハ横穴式デアアルノニ是ハ縦穴式デ、目下此ノ古墳ノミガ破壊ノ厄ヲ免ガレテ居ル。

昭和十年十二月廿九日脱稿

## 9、福岡県築上郡東吉宮村大字楡生堅穴式古墳〔三〇一七〕

### (一) 位置及現状

本墳は日豊中津駅の西方約一里、楡生と称する小部落の東方小丘の南端にあるもので、周開三十三間、高さ約二間、一見小山の如き円墳で、西北には巨石をもって築きたる石垣を廻らし、南方と西方とには石壇の設けがあり、上部は平地となり北東部には四本の老樹があつてこの古墳の古さを物語つて居る。

此の平地となつて居る所は且て同区の産土神たる御祖神社と云ふがあつて、天御中主神を祭つてあつたが、明治四十二年隣区鈴鹿の貴船神社に合祀したので、今では其の旧跡を示すため自然石一基を立ててあるのみで、他に何物もない。西方の上り段は近頃設けたのであるが、南方の石壇と西北方の石壇は、此の墳上を社地にする際設けたものと思はれる。

此の稿、縣に提出の予定にて執筆したるもの。

昭和十三年七月十一日 岡為造記

《古文化談叢》第11集より部分的に転載》

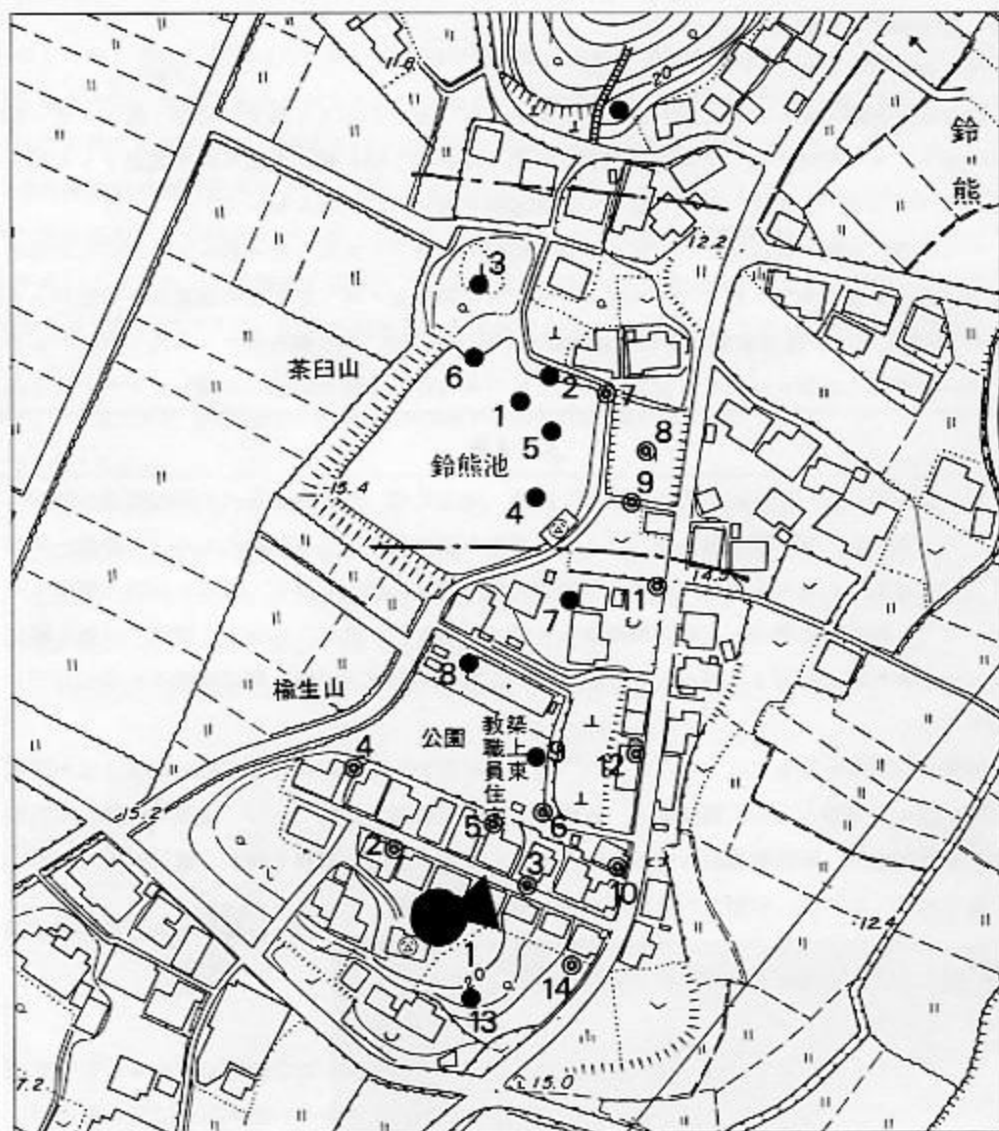


Fig.10 楡生山古墳周辺地形図 (1/2,500)

## 楡生山古墳

吉富町文化財調査報告書 第3集

平成3(1991)年3月30日

発行 吉富町教育委員会  
福岡県築上郡吉富町広津413

印刷 アオヤギ株式会社  
福岡市中央区渡辺通2丁目9-31